自画像

黒島傳治

青空文庫

なか〳〵取ッつきの悪い男である。ムッツリしとって、物事に冷淡で、陰鬱で、不愉快な奴だ。熱情なんど、どこに持って居るか、そんなけぶらいも見えん。そのくせ、勝手な時には、なか〳〵の感情家であるのだ。なんでもないことにプン〳〵おこりだす。なんにでも不平を持つ。かと思うと、おこって然るべき時に、おこらず、だまってにやけこんで居る。

どんなにいゝ着物をきせても、百姓が手織りの木綿を着たようにしか見えない。そんな男だ。体臭にまで豚小屋と土の匂いがしみこんで居る。「豚群」とか「二銭銅貨」などがその身体つきによく似合って居る。ハイカラ振ったり、たまに洋服をきて街を歩いたりしているが、そんなことはどう見たって性に合わない。都会人のまねはやめろ！

なんと云っても、根が無口な百姓だ。百姓のずるさも持って居る。百姓の素朴さも持って居る（と考える）。百姓らしくまぬけでもある。そのくせ、ぬけめがないところもあるんだ。このせち辛い世の中に、まるで、自給自足時代の百姓のように、のんきらしく、——何を食って居るのかしらんがともかく暮して居る。

まあ、農村からひょっくり東京見物に出てきた、猫背の若年寄を想像せられたい。尻からげをして、帯には肥料問屋のシルシを染めこんだ手拭をぶらさげて居る。どんなことを喋って居るか、それは、ちょっと諸君が傍へ近よって耳を傾けても分らんかもしれん。——小豆島の言葉をそのままま出しに使っとる。彼に云わせりゃ、なんにも意識して使って居るんではない。

笑われてもひとりでに出て来るから仕ようがない。

それだのに、やつは、町の者のように華やかな生活をしてみたいと思っているからおかしい。野心も持っとるし、小心でもある。こいつくらい他人のキタないところをいつもかつもさぐっている奴は少ないであろう。自分のキタないところはまるで棚にあげて人が集って話をして居っても、あんまり口を出さずに、じいっとうしろの方から、人のアラをさがして見て居るような奴だ。おそらく、いつまで生きて居っても、人間と生活の美しい方面は見ることが出来ず、いつも悪い醜い方面ばかりを見ておこったり、不平を云ったり、にや〳〵笑ったりして、陰鬱な面をしているだろう。かげでぶつ〳〵云っていず、自分からさきに出て、喋くりもし、みえを切ったり、華々しく腕を振りまわしたりやってみればいゝのだ。誰もさまたげやしない。ところが、彼自身でやる段になると、そういうことは皆目よくしない。そんなコツをさえもよう会得しない。そのくせ、人の醜悪面を見ては不公平だの、キタないのと云ってこぼして居るのだ。こんな奴は田舎へ行って百姓でもして居る方が柄に合っているのだ。――百姓をすると又、地子が高いの、取った米の値が安すぎるのとブツ〳〵こぼすであろう。

蛇の皮をはいだり、蛙を踏みつぶして、腹ワタを出したりするのは、一向、平気なものだ。一体百姓は、そんなことは平気でやる。、それくらいの惨酷さは、いくらでも持合わしている。小説の中でなら、百人くらいの人間は殺して居るだろう。人を殺すことや、怪我をさすことはなか〳〵好きな男である。

一体、プロレタリア作家は、誰でも人を殺したり、手や足をもぎ取ることが好きである。彼も、その一人である。まるで、人を殺さなければ小説が出来ないものゝように、百姓も殺せば、子供も殺す。パルチザンでも、朝鮮人でも、日本人でも、誰でも、かれでも殺してよろこんで居る。「橇」とか「パルチザン・ウォルコフ」などを見れば、これはすぐうなずける。彼は又、「二銭銅貨」では子供を殺している。彼の殺し方は、なか〳〵むごたらしい。「穴」の中の、朝鮮の老人などがその一つの例である。——あんなにまでして殺さなくてもよかりそうなものだ。小説の種は、人を殺すことだけにあるのではない。彼がブツ〳〵云うことも、彼が人の醜悪面ばかりを見ることも、書けば小説になるのだ。しかし、彼はもっと冷酷に、どんなにひどいことでも平気でそれを見つめて居れるようになりたいと云っている。それがリアリストというもんかな？　彼には、人の悪い、鷹のようなところがある。自分では理由をつけて俺等は、多くの屍をふみ越して、その向うへ進んで行かなければならない。同志の屍を踏みこして。それから敵の屍をふみこして、と。だが、彼が云うようなことはあてになったもんじゃない。

彼は、勉強家でもない。律儀な、几帳面な男でもない。克明に見えるが、それは、彼の小心さから来ている。彼は、いろ〳〵なものをこしらえるのが好きである。舟をこしらえたり、家をこしらえたり、トンボや、飛行機や、いたちや、雉を捕るわなをこしらえたり、弓で海の中に泳いでいる魚をうったり。しかし、どれもこれも役立つようなものは一つもこしらえない。みんな子供の玩具程度のものばかりである。子供の時分には、絵で見て橇をこしらえて雪の降

らない道の上をがた〳〵引っぱりまわって、通行人の邪魔をした。今、彼は、翼が六枚ついている飛行機をこしらえたらどうだろう、なんて空想している。小説をかいたりするよりは、大工か、樽屋になっていた方がよかったかもしれない。

だが、樽屋になると、又賃銀が安い。古樽の吹き直しはいやだ、材料が悪い。など、常にブツ〳〵云うことだろう。

青空文庫情報

底本：「黒島傳治全集　第三巻」筑摩書房
　　1970（昭和45）年8月30日第1刷発行
入力：Nana ohbe
校正：林　幸雄
2009年6月11日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

自画像

黒島傳治

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/